

「机上の空論、つてあるだろ」

アーサーが言うのと、フランシスはぱちくりと目を瞬かせた。アルフレッドは片付けていたテーブルをそのままに、カウンタへ戻ってくると、アーサーの前のグラスを勝手に取って、匂いを嗅いだ。そして、こくりと頷く。

「……ウーロンハイじゃなくて、ちゃんとウーロン茶だ。オレ、出し間違えてないよ」

「え、酔っ払ってないのか」
もしかして風邪でも引いて熱が、とアーサーの額に手を当てたフランシスの手を振り払って、何だよ、とアーサーが叫ぶ。

「オレがこんなことを言い始めたらおかしいかよー」
アーサーの叫びに、アルフレッドとフランシスは瞬きをして、顔を見合わせ、頷いた。

「つていうか、お前がそういうことを言い始めるのは、大体酔っ払ってるときだし」

「そうそう。いきなりご高説始めるんだぞ。えらそーに」

ねえ、菊？ アルフレッドにそう同意を求められて、

菊は否定せず、曖昧に笑った。

宵も更けた店内には、アーサーとフランシス以外の客はいない。日曜日だったので、臨時アルバイトのアルフレッドに出てきてもらったが、さほど混むことなく、一日が終わろうとしている。この店は特に閉店時間が決まっていないが、そろそろのれんを下ろしてもいいだろう。

店主の菊にも否定してもらえず、拗ねたアーサーの肩を慰めるように叩いて、フランシスは続きを促した。

「それで？ 机上の空論がどうしたんだ？」

「……もういい」

「あーもう、拗ねんなって。アーサー、はい、続きは？」

「机上の空論って、あり得ないことなんだろ。それがどうかしたのかい」

テーブルの片付けに戻りながら、アルフレッドも聞いてやると、そこまで聞きたいなら、とアーサーが空咳をした。面倒くさいね、とアルフレッドとフランシスが、視線を合わせたのをアーサーだけが知らない。